

富山県小矢部市 和田 俊信

(富山県認定農業者)



事例のポイント・要約

- ボカシとEM（有用微生物）を主に活用して土づくりを行う
- 水田19.6haを経営、2.9ha有機栽培を行っている
- 有機実施歴は16年、有機平均収量480kg/10aなので540kg/10a取りを目指している
- 次世代の若者の行える楽々自然農法を目指している

1. はじめに

魚津市まで比嘉教授の講演会に行き、始めてEMに出会った。平成7年よりEMを活用した自然農法栽培を始めた。始めた当初は、父親はあまり協力的でなかったが食味の違いを理解し協力するようになった。平成20年より息子も後継者として農業に従事するようになった。

2. 経営の概況

全耕作面積は1960aだが、水田は1000a、内270aで有機JASを取得している。畑作は玉ねぎ（有機）20a、転作ハト麦940aを作付けている。

3. 栽培圃場の概要

1) 圃場の立地と周囲の地形

小矢部市は富山県の最西端、山あり川ありの中山間地を有する自然豊かで、3本の高速道路が交叉する高速交通の要で「県の西の玄関」としての役割を担っている静かな街である。

2) 栽培条件

この地域は積雪は60~80cm程度で、雪解けは3月初旬である。無霜期間は3月下旬より11月下旬頃までである。

3) 圃場の課題と育土の方向

圃場はEMとEMボカシを中心に施用し、自家製資材だけ使用し土壌の団粒化を進めていきたいと考えている。



地元テレビ局で放映

4. 具体的な栽培技術

1) 耕起～作付けの準備

稲刈り後すぐに、稲ワラ全量をフレールモアで粉碎刈りを行い、早目に自家製ボカシ、EM活性液を施用し、バーチカルハローで表層耕起を行う。

ワラの分解を進めるのに土中にすき込まないで、株も粉碎耕起を行う。EMボカシは、熟成させた自家製を使用している。

2) 播種・育苗～定植

種籾は自家採種で行っており、育苗用土も自家製造で行っている。用土の作り方は好気発酵で切替えしを行う。発酵が終わったのを確認し育苗ハウス内で乾燥し、ふるいにかけて保管している。比重選は塩水で行い、EM液で浸漬処理を行う。育苗ハウス内にてプール育苗をする。また育苗期間中EM活性液で葉面散布を行う。苗立枯病、ムレ苗等の発生はなく田植え時には3～3.5葉で植付けを行う。

3) 播種・定植後の初期の管理

田植えは5月上旬に行う。田植え1～2日後に自家製のペレットボカシを散布している。田面にはイトミヅやミジンコの発生が多く見られる。ペレットボカシは雑草抑制と始期生育を目的として利用している。

4) 雑草対策

自然農法を長期間実施しているほ場ではヒエは減り、コナギが多くなる。初期にはチェーン除草（自家製造）を行い、表層攪拌除草（自家製造）を、ほ場を見ながら行っている。除草時間は10a当たり30分程度である。

5) 中間～後期の管理

中間管理については、間断灌水は行わない。出穂は7月下旬、落水は8月末に行う。

6) 病害虫の管理と対策

病害虫の発生は全般に少ないが、有機に転換するほ場ではイモチ病に警戒している。

7) 収穫作業の手順と収穫後の調整・出荷基準等

稲刈りは9月中旬に行っている。整粒が90%以上になる頃に収穫を行う。玄米は全量を色彩選別機に通して品質を高め、出荷販売をしている。収量は天候やほ場によって変わるが、平成22年度の平均収量は10a当たり508kg（8.4俵）であった。



開発した除草機



5. 今後の課題や取り組みたいこと

次世代の若者も行える、楽しく楽々有機農業を目指し、収量の上がる技術を模索している。また有機玉ねぎ、ハト麦の有機栽培にチャレンジしている。出荷する農産物についての品質の向上に努め収獲量の増加と規模拡大を目指し、安全で安心して食べられる米、野菜の生産を目指し頑張っている。

全国EM技術交流会より抜粋引用